

## 神戸市中央卸売市場本場西側跡地利用検討委員会

## 第 3 回検討委員会 議論のまとめ

## 議題：跡地利用計画の検討について

## 1. 運河の活用について

数日に一回は来ないといけないような施設が入ることによって、地域の方々に運河の方に動いてもらう。そういうきっかけになるような空間づくりが、運河の活用の1つの方向である。

運河巡りの船を企画したい。

運河については、国交省のプロジェクトに認可されたところだが、すぐに何かができることにはならない。必ずしも土地利用とダイレクトに関係づけて考える必要はないのではないかと。

運河は、回遊性というより、商業施設を起点にした連続性のようなものを重視すべき。

運河は、跡地の全体的価値の上昇を望める要素である。相乗効果をもたらすような組立てを考えるべき。

## 2. 市場との連携について

商業集積については、卸売市場で取扱う海産物などを小売りマーケットに出来るのか、スイーツとのゾーニングをどう考えるのかなど、具体的な議論が必要である。従来の卸売業が縮小する一方で、新鮮な食、安全な食への関心は非常に注目される新しいテーマである。時代の背景をもとに、新しいコンセプトを前面に出した目的意識の高いものとすべき。

活性化のために、観光客がバスで来て食事ができる場所を設けられないだろうか。野菜をはじめとする新鮮な食品の販売店や、地産の材料をつかった安くて美味しく、洒落た店を作れないだろうか。

市場を「見せる」ことで、食の安全をアピールするなど、上手い形はないだろうか。一方で、兵庫の認知度は低いので、特に、地下鉄海岸線をどう活用するかを含め、慎重に考えなければならない。

日本中で今までにない、地産・地消をアピールし、また食育にも取り組める、新しいアイデアを盛り込んだ施設とすべき。

かつての賑わいを取り戻すには、交流人口、昼間人口を増やす色々な仕掛けが必要である。

地産・地消、本当に神戸ならではの食をきっちりコンセプトに据え、マーケティングも含めてよく検討すべき。

神戸では、多種の産品が取れるものの、京野菜のような特徴的な産品があまりなく、うまくマーケットに乗せる必要がある。しかし、「地産・地消」、「食の安全」という非常に地味な話への価値が随分出てきた。

卸売市場のもつ安全、安心、新鮮、安い、珍しい、季節感などといったイメージを裏切らないように現すことが必要。

市場と小売りの関係をどうするのか。最寄品、買回り品のバランスをどうするのか。マーケティングを慎重に行うべき。

経済性を見失わない視点を基本に、食文化などの地域のブランド性を、1つだけでなく複合的に集積しなければならない。さらに、フレキシビリティのある事業展開をできる仕組みも考えるべき。

### 3. 今後の議論の視点について

商業施設や住宅などの施設について、委員会でどこまでの内容を決めるのがよいか。コンペの前段として、ある一定のコンセプトを出すべきである。

市場との連携といっても、卸売市場の取扱高など客観的データが無いなかでの議論は難しいものを感じる。

全体のコンセプトのなかで、どの程度条件をつけていくのか。今後、条件のたたき台的なものを検討していきたい。

人口動態や卸売市場の取引量などの客観的データをそろえ、全員共通の認識としたい。その上で、もう少し議論を深めていきたい。